

堀河百首題述懷をめぐって

内藤 愛子

述懷歌については、すでに先学の詳細な論考がなされているが、
峯岸義秋氏は、平安時代末期の歌合における述懷歌は中世的な和歌
であるとし、さらに、歌合における述懷の歌の史的流れにおいて、『堀
河百首』は新しい現実¹⁵⁷⁸に立つた述懷歌が詠出されるようになったと
指摘している。その百首における歌題述懷について考えてみたい。

『堀河百首』は百首歌という比較的新しい和歌形態であり、その
『堀河百首』における述懷の歌題は、雑の歌題に属し、雑の歌題が
すべてそうであるように、勅撰集や歌合にみられない新奇に歌題化
したものである。また、述懷という歌題は堀河百首題と歌題の一致
が多数に及ぶ『和漢朗詠集』にみられる歌題である。

そこで、『堀河百首』において、述懷という歌題を歌人達がどの
ように対応して詠じたかを具体的に作品に即して検討を進めること
に拠って述懷という歌題に対する詠歌意識を知ることができ、述懷
という題意を探ることができるだろう。

その方法としては、『堀河百首』の述懷の歌題における作品を發想
や主題、表現類形を整理し、検討を加えてみよう。

まず、述懷の詠歌のうち、我身のはかなさを主題とした特徴的な
歌が一首上げられる。それは次の師時の歌である。

1578 1578 1578
この歌は、自分の育てた子供がいつしか自分のことを思い出して

くれるだろうことを詠じている。これは、自己のはかなさを自覚し、
次の世代を意識している。しかも、間接的表現を利用し、觀念的な
扱理した述懷歌と言えるであろう。

次に、前掲の歌と同様で、無常の心を主題としながら仏教思想と
の関連がみられる詠歌は次の三首である。

1570 風をまつ草葉の露をおほけなく蓮の上にとれとそ思ふ
1574 入月のなごりの空をなかもれは西に心はかゝるなりけり
1581 今とはた、西に心をかけ草の葉にをく露を我身とそ思ふ

この三首は、いずれも我身のはかなさを自覚した歌で、仏教思想
との関連から「蓮の上にとる」「西に心かける」ととらえ、極
楽浄土の願いが詠じられており、来世を意識している。が、仏教的
救済の面を主としたものではなく、自己のはかなさに即した詠歌と
言える。

作歌上の手法をみると、これらは懸詞や縁語等を巧みに用い
ている。また、我身のはかなさを露にたとえたり、月が沈んで行つ
た空の風景に無常の心を托すという手法に拠って我身のはかなさを
自覚し、主体的に詠嘆している。

また、堀河百首題の雑には述懷とは別に無常という歌題が設定さ
れている。その無常の歌題のなかに、同様な作歌上の技巧に拠って
無常の心を詠じた歌が見出せる。無常の心を入月に寄せた歌として

藤原顯仲の歌が上げられる。

1562 山の端に入ぬる月そ哀なるわれもさこそは世にはかくらめ

次いで、はかなさを露にたとえた詠歌としては

1557 朝日まつ露はかりなる命もてなからへ思ふ人そはかなき

1565 をく露を我玉しるとしらねはやはかなき世をもいとさる覧

1566 消ぬまもえこそたのまね道芝のかゝれる露の我身と思へは

この三首の無常の詠歌は、いづれも、我身のはかなさと同時にはかない世の中が主題として受け取れるだろう。

また、前に掲げた述懐の三首のように無常の心を主題としながら、仏教思想の裏付けに拠った詠歌が無常の歌題において一首みられる。それは次の公任の歌である。

1558 空蟬のはかなき世とはしりなから蓮をねかふ人はまれ也

この歌は、この世のはかなさを極楽浄土を願う人が稀れであるということに拠って世の中のはかなさをより強調し、畳み掛けるように無常を詠嘆している。この歌も、はかない世を主題に据えている。

このように無常の歌と述懐における三首とを比較すると、作歌上の技巧は共通するものがみられるが述懐の三首は我身のはかなさを主題として詠嘆しており、無常の歌題は世のはかなさを主題としているという相違が捉えられることは興味深い。これは、少なからず無常と述懐との歌題に対する詠歌意識の相違と受けとめることができ、それは歌題のもつ詠作条件の相違であり、少なからず歌題の区別がなされていると言つてよいだろう。

次に、述懐の詠歌のなかで、嘆老という共通の発想をもった歌が五首みられる。

1569 何をして翁さひにけん朝ことに鏡のかけをかつとかめつ、

1573 なそやこの我身はこしの白山かかしらに雪のふりつもるかな

1575 隙過る駒よりもとき陽炎の玉きはるいそちの春に逢にける哉

1584 いくめぐりすこしきぬらん春秋にそむる心をうつろはやつ、

1585 むつことをいはても年のへぬる哉老をともなふ人しなれば

これら五首は、いづれも老いた我身を自照し、空しく去つて行った過去を振り返り悔む心を述懐している。

詠作技巧としては顯季の歌(1573)において年老いた姿を越の白山に降る雪に比喩しているが、例えば『拾遺集』249 忠見の歌等に見られるように、常套な手法と言えらる。

249 年ふれはこしのしら山おいにけりおほくの冬のゆきつもりつ、

また、紀伊の歌(1584)は「来ぬ」に「絹」を懸け、その「絹」の縁語として「染る」を用い、「染る」は「初る」を懸けるという技巧を徴らし、年老いたことを詠嘆している。

老いを述懐の歌と同じ作歌上の技巧を用いた詠歌が『堀河百首』の懐旧の歌題に見られ、それらは決して新しい技巧とは言えない。

1531 老らくの影みるたひにますか、み猶昔こそこひしかりけり

1534 日にそへてかしらの雪は積つ、ふりにしかたそいと、恋しき

これら五首のうち、典拠が求められる詠歌としては公任と仲実の歌、二首が上げられる。

公任の歌

1569 何をして翁さひにけん朝ことに鏡のかけをかつとかめつ、

は『和漢朗詠集』763に典拠を求めた詠歌と言えらる。この歌は『古今集』や『古今六帖』に収められているが、『和漢朗詠集』では述懐の歌題に配列されていることから、典拠をそこに求めたと考える方が妥当と思われらる。

765 何をして身のいたつらに老いぬらん年のおもはむ事もやさしくこの歌の発想や表現を使いながら、いたづらに年老いてしまったことを悔やむ心を述懐している。

次に、仲実の歌

1575 隙過る駒よりもとき陽炎の玉きはるいそちの春に逢にける哉
は異体の施頭歌であり、時の過ぎ去ることのはやさを『史記』等に
みられる「人生一世間、如白駒過隙」の詩句に求めて、年若い
たことを詠じている。また、俊頼の長歌(1576)にも「隙行く駒に」
とあり、時の過ぎ去ることのはやさをこの漢詩句表現を翻訳して用
いることはかなり一般化されていたと言えそうである。単なる偶然
かもしれないが、どちらの歌も「いそちの春」「いつ、とを」と共
に五十という年齢と共に詠まれているのはおもしろい。

これら五首のように、述懐という歌題に嘆老を主題とした発想の
述懐歌は『和漢朗詠集』に詠じられており、しかも、堀河百首題の
雑において多数の歌題一致がみられることから『和漢朗詠集』との
影響関係が極めて自然に認められるであろう。また、『句題和歌』
において、すでに嘆老を詠じた述懐歌が見出されることから考える
と、述懐歌で嘆老を詠むということは伝統的な発想と指摘できるで
あろう。

『堀河百首』の述懐の歌題において、注目されるのは、一五一句
にも及ぶ俊頼が詠じた長歌(1576)と言えるだろう。

述懐の歌題に長歌形式に拠つた詠歌は、『大納言経信集』に一首と
『江帥集』に二首見出せる。また、『散木奇歌集』雑下、長歌には
『堀河百首』の長歌をはじめとし、三首の長歌、返歌が配列されて
いる。そのなかには、「中納言国信の坊城の堂にて人く長歌よま
せけるに、向泉述懐といふ事をよめる」という詞書のある長歌(1512)
や「刑部卿政長の八条にて、人くあつまりて長歌の会せられけるに、
初冬述懐といへる事をよめる」という長歌(1514)が載せてある。
これらの詞書きから察して、当時、述懐歌を長歌で詠じていたこ
とが窺え、長歌を詠む歌会という限られたところで詠まれていた様
子が知られるだろう。

『堀河百首』における俊頼の長歌を要約すると、激しく沸き出す
心はあるが引いてくれる人もなく涙し、我心の表現を理解してくれ
る人のないことを嘆く。また、現実生活における不遇を嘆き出家し
ようと決意したものの様々な絆があつて心に添うことができず、生
きてきた人生を振り返つては命のはかなさを自覚し、自分の和歌に
対する矜持を示しながらその心に添わない世の中を述懐して結んで
いる。

この長歌は、歌人としての作歌活動に対して周囲の人達は少しも
理解を示さず、評価しないという身の不遇を悲嘆していることが重
要な内容になっている。

このような、長歌という詠歌形式を用いて現実生活に密着した歌
人としての不遇感を表白することは、初期百首歌の創始者である好
忠や順の家集において見出される。それは、少なくとも好忠や順の
歌人の不遇感を盛つた長歌形式を俊頼が継承し、『堀河百首』にお
いて長歌形式で詠じたと思われる。

長歌と同様な発想で、現実における憂悶や悲嘆を主題とした詠歌
は以下のようなものである。

1572 身のうさはすきにしかたを思ふにもいま行末のことぞ悲しき
1577 世中はうき身にそへる影なれや思ひすつれとはなれさりけり
1582 あきらけき世には嬉しくあひ乍うれへ晴せぬ身をいかにせん
1583 たくひなく人数ならぬ身のうさを思ひもしらすこす也けり
これら四首は我身にかかれる嘆きの表白であり、現実的悲嘆が感
得される。それらは、「憂き身」「うれへ晴せぬ身」「人数ならぬ
身」と我身を捉えて、具体的に語り、社会的に恵まれないことを詠
嘆している。

殊に、俊頼の歌(1577)は前述の長歌の返歌であり、長歌の内容を
凝縮させたもので、現実生活における悲嘆を自覚し、捨て去ること

のできないことを述懐している。

この歌は、俊頼自身が撰した『金葉集』に収められ、述懐歌が多数入撰している『千載集』雑下の巻頭に長歌と共に掲げられている。このことから、後世への影響を与えた歌であることが知られるだろう。また、俊頼は『堀河百首』において述懐以外の歌題が述懐的色彩に被われ、述懐の歌題は長歌で詠まれたことは、百首歌形式のもつ「沈淪訴嘆」という性格や前述のような長歌を継承したと思われる。

次に、本歌または典拠が求められ、しかも現実生活の悲嘆を述懐している歌は藤原顕仲(1579)と基俊(1580)の二首である。

藤原顕仲の歌

1579 哀しむ人しなれば夜と、もに我思ふことをいはてやみぬる
は『伊勢物語』百二十四段の歌を本歌として上げられる。

むかし男いかなる事を思ひける折にかよめる

思ふこといはてたやみぬべきわれとひとしき人しなれば
この歌の発想及び表現を典拠とし、我身を理解してくれる人がいないという現実的の不遇を訴嘆している姿が見出される。

基俊の歌は次のようである。

1580 唐国にしみし人も我ごとく三代まであはぬなけきをはせし

この歌は『和漢朗詠集』の述懐にみられる正通の漢詩句の一部分を撰取しているか、『漢武故事』や『蒙求』に掲げている顔驕蹇剝の説話に拠ったかは疑問は残る。いずれにしても、この歌は発想に典拠が求められる歌であり、三代まで微官に沈淪した顔驕に我身の社会的地位の不遇さを重ね合わせて詠嘆している。

齡亞顔四 過三代而猶沈

恨同伯鸞 歌五噫而將去 (卷下述懐79)

このように出典のある歌は、表現、発想を典拠を求めながら、社

会的に恵まれない我身の現状に対する深い嘆きの訴えを感得できるであろう。

また、現実的な悲嘆を詠じた述懐歌のなかで、特徴的発想の歌が一首みられる。それは国信の歌(1571)である。

1571 月みてもむなしき空にあまる迄君か千世へんことをしそ思ふ
この歌は天皇の御世が永く続くことを願う心境を発想の基盤として詠じられた述懐歌である。この歌の作歌事情を考えてみると次のようである。

『堀河百首』の成された時期には諸説があるが最終的奏覧は長治三年(一一〇六)とする説が有力である。その長治三年前後は、『中右記』『殿記』等の記録類を紐解いてみると、その頃堀河天皇が病気がちであることは知られるところである。

この歌の作歌時期が天皇が病気がちであったか判断は不可能だが、病気がちである天皇に対する作者の思いが推察できる歌である。堀河天皇である側近公卿としての国信が病気がちという現実において詠嘆された歌であることは確かであろう。有力な近臣である作者自身にとつて病気がちである堀河天皇に対する思いは公的生活という区別なしに、むしろ個人的な悲嘆としてとらえて詠じたと受け止められる。殊に、堀河天皇に対する思いは、天皇の崩御をいたみ、天皇に対して追悼愛惜を『懷旧百首』として詠じたことから推測しうるところである。

この歌は、天皇が病気がちである現実的な悲しみを発想の契機とし、天皇の御世が永く続くことを願うという作者の心境を述懐した詠歌と言えるだろう。

このように『堀河百首』の述懐において、現実生活における悲嘆を発想の契機とし述懐する歌は八首を占めている。それはあくまでも現実生活に密着した悲嘆を主体的に詠出しており、現実の切実さ

や生活のうずきを感じ得る。また、現実における我身の不遇を発想の契機とする述懐歌は、少なくとも百首歌形式の創始以来、不遇感の訴嘆を托するという性格を踏えて成された詠作意識と捉えらるるであろう。しかも、院政期の思想や感情との結び付きなしには成されなかつたと思われる。

『堀河百首』における述懐の歌を類形別に整理し、いくつか検討してみたが述懐歌の詠歌意識はどの類形においても、自己を否定的立場において自照し、悲嘆の主体を詠出するという様相がうかがえるだろう。殊に、現実生活の不遇を発想の契機として、しみじみと述懐する傾向が強くみられ、述懐する心の深さを示している。それは百首歌形式のもつ伝統的性格を踏えて、院政期という時代思潮の反映させた、新しい現実に立つた述懐歌といえるだろう。

このように、『堀河百首』において、述懐が歌題に組み入れられることに拠って、新しい発想が生まれたものと推測され、それが次第に一般化する述懐の歌題に対する詠歌意識の基盤となつたと思われる。

(1) 注

1) 峯岸義秋氏「歌合における述懐の歌」(『東北大学教養部文科紀要1』S 33・3) 同氏著『平安時代和歌文学の研究』(桜楓社) 田尻嘉信氏「述懐歌について——「有心」との関聯——」(『和歌文学研究十一号』S 36・5) 松野陽一氏「組題構成意識の確立と継承——白河院期から崇徳院期へ——」(『文学・語学第七〇号』S 49・1)

(2) (3)

伝本に拠つてはこの歌の「いそちの春」の部分の異同が激しくみられる。橋本不美男、滝沢貞夫著『校本堀河院御時百首和歌とその研究』本文研究篇(笠間書院)の本文篇参照。

(4)

『散木奇歌集』151は「経信卿家集」153の詞書から推察すると、永保二年十月の刑部卿政長の八条亭「初冬述懐」題長歌歌合の歌であろう。また、『大納言経信集』128と『江帥集』313の長歌はどちらも同歌合の長歌と推察できる。

(5)

『曾祢好忠集』1・93・185・277の四首の長歌があり、春夏秋冬のはじめに長歌が位置し、いずれも述懐歌である。『順集』において長歌(40)があり、それは『拾遺集』雑下571に載っており、不遇感を訴嘆する長歌である。松野陽一氏注(1)論文参照。

(6)

藤岡忠美氏「平安和歌史論」(桜楓社) 上野理氏「俊頼と堀河百首歌」(『文学・語学』42) S 41・12) 同氏著『後拾遺集前後』(笠間書院) 石田吉貞説 第一次成立康和年間(四年頃) 第二次成立長治元年十二月五日以後年末。

(7)

上野理氏説 長治二年五月二十九日から翌三年三月十一日までの間。橋本不美男氏説 第一次成立康和四、五年、第二次成立長治二年春から翌三年春までの間。